

A・スミスの「生産的労働」に関する一考察

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

44

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

97

(終了ページ / End Page)

123

(発行年 / Year)

1976-12-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008364>

A・スミスの「生産的労働」に関する一考察

平林 千牧

一

A・スミスの『諸国民の富』とD・リカードの『経済学および課税の原理』（以下、『原理』とのみ表示）の原理的領域における編別構成またはそれらの見出しを比較すると、一見して両者の差異に気づく。リカードの『原理』には、「蓄積」と表示した見出しはない。もちろん、リカードの『原理』に蓄積論がない、と言うわけではない。また、むしろ『原理』の「原理」的領域自体は、その全体が蓄積を前提する展開となっているとも言える。周知のように、リカードは、スミスの『諸国民の富』における二面的価値規定の批判をその「原理」展開の出発点に置いた。しかもそのさい、彼にとって問題であったのは、『諸国民の富』第一篇第五章と第六章とのあいだの、言い換えれば投下労働価値論の放棄による支配労働価値論への移行の論理構成であったわけで、これは、「ストックの蓄積」と土地の占有との双方に先行する社会の初期未開の状態」と、この「蓄積」と「占有」とが成立した状態との理論的平仄にかかわる論点であった。リカードはこのあいだの関係つまり蓄積と占有の成立に資本・賃労働・土地所有関係の成立を、投下労働価値論に基づく統一的説明によって、スミスの克服が可能と考えた。そこで、リカードにおいては、蓄積は、資本・賃労働関係と同義の意味を帯びざるをえないことになったわけであって、彼の原理体系

のなかでそれが固有の領域を得る意義もいけば消失したのではないかと思われる。こうした事情は、リカードが『原理』の「序文」において、「分配を左右する法則」と言い、また「地代、利潤、および賃銀の自然の成り行き」と言っていることによっても察することができる。⁽¹⁾

もちろん、『諸国民の富』では、蓄積論はスミスにおいて独自の考察対象をなしていたのであって、リカードが彼の原理的展開でいけば必然的に処理した仕方に十分適応するような構造にあるものとは言えない。端的に述べれば、スミスは、第一篇第一章から第五章までにおいて、分業論・二面的価値規定によって彼に抽象可能であった社会の経済的基礎過程を明らかにしたのであった。したがって、彼が第二篇で論じなければならない問題はつまり蓄積論は、この第一篇で展開された彼の原理体系の基本的規定と密接な関連を有しているのであり、とりわけ二面的価値規定によって彼の蓄積論に独自性を与えたその根本的性格が示されなければならない必然的な内容を有するものであったということである。もちろん、ここにはすでに重要な論点が介在している。すなわち、第一篇の先述の箇所では、スミスはいわゆる資本・賃労働関係を捨象しており、第二篇では三階級分化の社会的枠組を設定し、そのもとで彼の理論的処理を与えているのである。これは、第一篇第六章以降のスミスの設定と不可分の関係にあると言つてよい。そしてまた別の表現では、商業社会と資本主義社会との対象認識のスミスなりの展開方法に関連を有する問題とされてきたこともある。だが、社会の生産構造的認識の問題とすれば、直接には第二篇における展開こそ、第一篇のいわゆる商業社会としての社会の経済的基礎過程の資本主義的商品経済における具体的展開をなしたものとされるべきと思われる。

しかし、先述のリカードの「原理」的展開を見るならば、彼は、周知のように、『原理』第一章第三節の冒頭で次のような指摘を行なっている。すなわち、「アダム・スミスが言及しているかの初期の状態でも、狐師に彼の獲

物を仕留めることを可能にするためには、おそらく彼自身によってつくられ蓄積されたのであろうが、若干の資本が必要であらう」と。リカードは、こうした観点のもとに、結局、過去に対象化された労働と生きている労働との関係を資本・賃労働関係とし、スミスの第五章の世界を改変し、彼の労働価値論の一貫性を確立せしめようとしたのである。したがって、リカードの原理体系においては、社会の経済的基礎過程を彼なりに抽象するというような作業は明示されていらないように考えられる。そうした意味で、彼の労働価値法則の修正論は不可避でさえあった。言い換えれば、彼は、投下労働価値論のいわば裏面をなす社会の経済的実体を、直接資本家的商品経済における特殊な編成関係で把握したのであり、それゆえ彼の労働価値論の困難は最初から生ずべき性格にあったのである。

もちろん、ここでリカードの「原理」体系をスミスのそれに比して劣るものと評価しようとするものではない。リカードのそれは、古典派経済学の枠内において、スミス経済学を発展させるための必然的な所産だったと言いうる。他面からすれば、スミスの第二篇の展開は、その独自性にもかかわらず、理論的性格の別出に対し困難を伴うものとなっている。それは簡単に言えばこういうことになっている。すなわち、スミス自身に従えば、「諸国民の富」の原理的領域が第一・二篇にとりて構成された理由は、彼の生産力論が二支柱によってつまり分業と生産的労働とによって構築されたためである。ところが、この「諸国民の富」の二支柱は、その理論的展開としては周知のように分業に基づく商業社会の設定と、資本的ストックの蓄積と生産的労働の充用すなわち資本・賃労働関係の再生産との領域に二分されている。端的に言えば、これは商業社会と資本主義社会とに二分されている、ということのように思われる。この場合、彼がただ単に生産力の歴史的発展の序列を程示しただけとるのであれば、おそらく問題は単純であらう。だが、彼の『諸国民の富』の「序文」における論述からしても、また第一、二篇の展開からしても、彼が問題の説明を歴史的に行なったとすることはできない。³⁾ もちろん、スミスにとっても、彼の経済学

的認識の対象は歴史的な産物であつて、その点は否定されるべきものではない。それにもかかわらず、この歴史的な対象を統一的に解明するものが、ほかならぬスミス経済学の原理的性格に帰着するわけであつて、『諸国民の富』の第一、二篇がこうした対象の原理的考察をなしているものとすれば、その両篇の統一的理解——しかも原理的な展開としての理解——が与えられなければならないことになる。

そこで、一方で商業社会として他方で資本関係の再生産として論じられたスミスの生産力論の体系は、如何なる論理的性格に基づいて統一せられているかが問題になるのである。すでに、こうした点に關しては、いくつかのすぐれた考察が果たされてきているのであるが、なお若干検討すべき点が残されているように思われる。また、筆者は、すでに『諸国民の富』第一篇第一―第五章については、ある程度の考察を試みたのであるが、ここでの検討についても、スミスの第二篇における展開の理論的平仄を重視しなければならぬと考えている。本稿では、『諸国民の富』第二篇第三、五章を中心に、第一篇におけるスミスの原理的規定の展開の特質との關係に可能なかぎり立ち戻り、論究を加えようとするものである。

(1) もちろん、ここでは、リカードの『原理』における第五、第六章での論述が彼の蓄積論として特に重要であるということを経視しようというわけではない。ただ、彼の『原理』の成立事情を考慮し、かつまた今述べた彼のスミス批判の視点とそれによつて構築された原理の性格を見るならば、このように言いうると思われるのである。なお、ここでは彼の『原理』について特に取り上げるわけではないが、別の側面からこうした点に簡単に言及すれば、そもそも彼の価値論の展開自体にすでにその性格が表現されているとも考えられる。周知のように、リカードの価値論は、スミスの二面的価値規定を一面的に純化したものである。だが、その純化とは、投下労働価値論は、「商品の……相対価値を決定する」原理として、また支配労働価値論は放棄されたが、労働の価値の問題としては「賃銀として支払われるであろう割合」が「利潤の問題にとつて最も重要で」「利潤が高いか低いかは、賃銀が低いか高いかに正確に比例する」という投下労働価値論と価

値生産物の分割比率の關係のうちに論ぜられる性格になった。したがって、こうした処理は、原理的展開をその当初から、労働価値論とそれに基づく資本・賃労働の価値分割比率決定論とに密着させているわけであって、これは、資本・賃労働の再生産關係を労働価値論自体に包含させざるをえないものとする理論構造だと考えられよう。

なお、リカードの労働価値論の性格を考える場合に、彼の労働価値論の理解にスミスの「社会の初期未開の状態」が如何なる地位を占めていたかという興味ある問題がある。ここでは、とくに閑説できないが、とりあえず、彼の価値尺度論との関連で、以下の論考を参照されたい。高島光郎「J・S・ミルの価値尺度論」(『エコノミア』第十八卷、横浜国立大学経済学部、一九六一年、所収)、千賀重義「リカードの不変な価値尺度論の再認識」(『経済科学』、第一八卷第四号、名古屋大学経済学部)。

(2) もちろん、この場合に、リカードが、彼の対象とした社会の経済的編成の統一的性格であるとか、あるいはその社会編成の商品経済的運動による被規制的性格とかを明らかにしなかった、ということの意味するわけではない。ただ、ここでは、彼が、スミスやマルクスのように、なんらかのかたちで、資本主義的編成とは区別される社会の経済的基礎過程の抽象を原理的展開のうちに提示しえなかった、ということを指摘しているにすぎない。

(3) 第一篇と第二篇との理論的関係については、本文のなかで明らかにするとおりである。この関係とは不可分に結びついている第一篇第一章第五章と第六章との関連、あるいはこの場合に介在する「社会の初期未開の状態」の性格等については、すでに若干の検討を行なっておいた。拙稿「経済学批判体系」の一考察」(『および』(『経済志林』、第四二卷第一号、第四三卷第四号)を参照されたい。

二一

『諸国民の富』第二篇のいわゆる資本蓄積論と言われている領域は、その展開の中心部分を第三章に置いているとしてよいであろう。また、その第三章の重要論点は、周知の生産的・不生産的労働の規定にある。従来より、スミスのこの規定に関しては種々論究されてきたが、必ずしも、恰も第一篇第五章と第六章との関係に対する解明と

同様に、スミスの論理展開をそれ自体として彼なりの論理的・一貫性において考察するということに、十分ではなかったように思われる。またスミスのこの規定は、ただ第三章だけではなく、第五章においてもかなり重要な理論的役割を果たしているわけであって、この両章での彼のこの規定をそれなりに統一的に理解することにも、問題が残されているように思われる。以下、この論点について、順次に若干の考察を加えてゆきたい。

周知のように、スミスは、生産的労働と不生産的労働との判別規準を、二つの規定によって与えた。すなわち、第一に、労働を加える「対象の価値を増加させる部類」に属する労働か、あるいは「このような結果を生まぬ別の部類労働」か否か、である。第二に、「ある特定の対象または販売しうる商品に固定され実現される」労働か否か、である。スミスは、この二つの判別規準をもって、彼の生産的労働の雇用の増進による社会的生産力の増大の二大要因の一方としての蓄積の意義を明らかにしようとした。二大要因とはつまり、第一篇における分業論と、第二篇での生産的労働の維持と増加である。

ところで、スミスのこの生産的労働の基準については、すでに多くの批判的考察が加えられているわけであって、その基準自体の当否については、こと改ためて検討する必要はないであろうが、以下の行論との関係上、これに関する若干の検討を行なっておこう。⁽¹⁾

まず、マルクスのスミスにおけるこの問題の検討を見てみよう。彼は、代表的には、「剰余価値に関する諸学説」(以下「諸学説」と略称)においてそれを詳細に行なっている。彼の検討の主たる論点は、次のようなことに帰着する。すなわち、第一の規定は、スミスが「事柄そのものを概念的に論じ尽し、その本質をついでいる」ことを示す。というのは、スミスは第一の規定において、「生産的労働を、直接に資本と交換される労働と規定している」(Theorien über den Mehrwert, Marx-Engels Werke, Bd. 26-1, S. 127.)からである。これに対し、第二の規定におい

ては、スミスは「生産的労働と不生産的労働とをそれが資本主義的生産に対してもつ関係によって規定することから、逸脱」(a. a. O., S. 132) してゐる。すなわち、「特定の対象または販売しうる商品に固定」されない「単なるサーヴィス提供」も、資本に雇用され、「賃銀と利潤を回収させる」のであれば、生産的労働にはかならないからである。⁽²⁾

こうして、マルクスのこの問題に関する検討は、ひとまずきわめて的確である。しかし、マルクスの考察においても、第二の基準は、単にスミスの誤りとしてしまふわけにはいかない論点をも含むものである。つまり、端的にはこうである。すなわち、「商品」は、ブルジョアの富の最も基本的な形態である。したがってまた、「生産的労働」について、それは「商品」を生産する労働だと説明することは、生産的労働とは資本を生産する労働だと説明する立場よりも、ずっとはるかにより基本的な立場に昭応するものである」(a. a. O., S. 143)。もちろん、ここでは、ただ商品や貨幣が資本に対して基本的な形態規定にあるということだけで、そうした指摘が可能とされる関係にあるわけではない。あるいは、マルクスにそうした理解が生じうるような原理的思考や論理があったとしても、事柄は、スミスの理解に依存しているわけであつて、むしろスミスに即して、彼の原理的規定において生じた事柄とされなければならぬ。⁽³⁾

しかし、なお、『諸学説』におけるマルクスの指摘をいまま少しみておこう。「A・スミスの場合には、商品の二つの条件すなわち使用価値と交換価値とがいっしょにとらえられており、したがって、なんらかの使用価値すなわち有用的生産物となつて現われる労働は、すべて生産的である。労働が有用物となつて現われるということは、すでに、この生産物が同時に一定量の一般的な社会的労働に等しい、ということを含んでいる」(a. a. O., S. 144)

かくして、スミスの規定において、重視されなければならないものは、彼において第二の規定が第一の規定とと

もに持ち出されざるをえなかつた論理的意味なのである。または、言い換えれば、スミスは、なぜ第一の規定だけにとどめないで、第二の規定をも与えざるをえなかつたのか、ということである。と言うのは、商品を「ブルジョアの富の最も基本的形態」として考慮するならば、すでに、第二の規定は、「第一の規定に事実上含まれている規定」としうるはずだからである。すなわち、「生産的労働者」というのは、その労働が商品を生産する労働者のことであり、しかも、この労働者は、彼が生産するよりも多くの、彼の労働が要するよりも多くの、商品消費することはない、という規定に到達する」(以上、*a. a. O.*, S. 134) ことになるからである。

とはいえ、スミスにおいては、生産的・不生産的労働の区分を、第二の規定から出発して第一の規定を導出する、というような論理的展開を明示することによって両規定を描いているわけではない。言い換えれば、彼は、第二の規定の展開が第一の規定だ、としているわけではない。しかし、スミスのこの問題を考える場合、マルクスの指摘も考慮されてよい。つまり、スミスは、両規定によってはじめて彼のこの問題の解決を与えうるとしたわけであり、しかも、スミスの両規定は、原理的に整理するならば、マルクスの指摘にも通じるような関連をもつものだからである。周知のように、スミスは、「諸国民の富」第一章第一章から第五章までにおいて、「商業社会」を抽象し、彼の労働価値論の論証を行なっている。すでに別の論稿で指摘したように、彼は、その「商業社会」としての抽象によって、あらゆる社会に共通する労働生産過程を取り出し、これを対象とすることによって、経済学の原理の規定の根本をなす労働価値論を彼なりに論証しえた。¹³⁾ しかも、この彼の「商業社会」の抽象は、彼の対象に対する視角——つまり資本家的商品経済の発展としての対象に対する視角——たる生産力論によって規定されていた。

「労働の生産諸力における最大の改善」の根拠を「分業」に置き、そこから彼の体系を出発させたゆえんである。こうしたことから、すでに明らかのように、労働生産過程としての社会の経済的基礎過程の彼独自の抽象は、そ

れが「商業社会」としての抽象であれ、彼の原理的体系の核をなすわけであって、社会の物質代謝過程がいかなるかたちで維持されようとも、変更されることのない関係にあるものと言えよう。さらにまたつけ加えるならば、その「商業社会」を対象とした彼の労働価値論の論証の特質すなわち投下・支配労働価値論としての論証も、商品経済的抽象において一般化された労働生産過程での労働価値論のいわば絶対的本質を明らかにしたものと言ってよいであろう。したがって、こうした労働生産過程がいかに編成され枠組みを与えられようとも、あるいはまた、そこでの実体的本質としての労働がいかに具体的に具体化されようとも、これはいずれの場合にも固持される関係にあるとされなければならないのである。⁽³⁾

右のような内容は、スミス自身の理解に即せば、明白にこのように言われている。周知の第二篇第三章の最初の部分での論述である。すなわち、「製造工の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品に固定され実現されるのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、少なくとも暫くのあいだは存続する。それは、いわばなにか他の場合に必要に応じて使用されるために、貯蔵され貯えられる一定量の労働である。この対象、またはそれと同じことであるが、この対象の価格は、あとになってから、はじめにそれを生産したのと等量の労働を必要に応じて活動させることができる。」(*The wealth of nations*. Ed. R. H. Campbell and A. S. Skinner, London, 1976, Vol. 1, p. 330. 大内兵衛、松川七郎訳、I、岩波書店、三三三ページ。)

ここで言われていることは、労働と労働生産物との関係を結節点とする社会の物質代謝過程にはかならないのであって、それがスミスに特徴的なことは、労働と労働生産物とが商品経済的に等価の関係として絶対化されていることである。しかし、このことは、すでに指摘したように、第一篇における彼の労働価値論に基づいて必然的に生じてくることであり、スミスにおいて動かし難い条件によって展開されているのである。

かくして、生産的・不生産的労働における二つの規定のうち、第二の規定が、スミスにおいて与えられた原理的根拠は、彼の第一篇の「商業社会」の性格にあると考えられるよう。とは言え、とうぜん、さらに検討されるべきは第一の規定との関係においてこれがいかに解されるべきかであり、むしろこれが第二篇での固有の事柄なのである。

スミスが、生産的・不生産的労働の区分に関する両規定において、明確な理論的序列のもとに最初の規定から次の規定へと展開したかどうかは、あまり明確ではないように思われる。しかし、結果的にみれば、それはそのように処理されているとしてもよいのではなからうか。すなわち、先きに引用した彼の叙述によれば、「商品に固定される」ものとしての第二の規定における生産的労働に関する眼目は、こうした労働の対象化物またはその対象の価格が「あとになってから、はじめにそれを生産したのと等量の労働を必要に応じて活動させることができる」か否かにあるとされているとしてよいであろう。そうだとすれば、彼は、「対象の価値を増加させる」生産的労働の最初の規定を、この規定によって補足する、あるいは第二の規定によってこの概念の完成を与えようことを意図していた、と考えられよう。

こうした理解を可能とするものは、スミスの第二篇の蓄積論のための「序論」の叙述においてもみられる。周知のように、彼は、そこで「資財の蓄積」が「分業に先だつ」こと、したがって「労働もまた、先だって行なわれる資財の蓄積だけに比例して細分される」ことを指摘する。彼のこの指摘は、結局、「資財の蓄積」が「労働の生産諸力の大改善を行なう」ために不可欠なことであり、それが「自然にこういう改善を先導する」という考えに帰着する。もちろん、ここでは、生産的労働それ自体の規定として言及されているわけではない。だが、いずれにしても、資本の蓄積あるいは社会的再生産の問題を労働の対象化たる物的資財に総括し、そこから、再生産における労働

働の社会的性格を規定していることに変わりはない。⁽⁶⁾しかも、この労働の社会的在り方は、スミスにおいても具体的対象としては資本の価値増殖運動に基づく生産過程によって規定されているのである。言い換えれば、労働の対象化物を通じて労働の性格が規定されるのは、この対象化物を対象化物として具体化する主体すなわち現実の資本の価値増殖運動との関係以外にないということである。

とは言え、この場合、スミスは、労働生産過程が資本の生産過程において価値形成増殖過程として行なわれることを、明らかにしているわけではない。しかし、彼にあっては、彼の「商業社会」の具体化は三階級分化の枠組を通じてなされていることを否定することはできない。しかも、すでに別のところで論じておいたように、この枠組のみのもとで、労働は「事実上」剰余価値を生産する労働として確認されているのである。⁽⁷⁾そこで、資本の蓄積においてまず明確にされることは、「対象の価値を増加させる部類」の労働として、生産的労働が規定されることである。もちろん、スミスにあっては、この第一の規定に關していわば一種の理論的弱点を有している。というのは、先述のように、彼は資本の生産過程を価値形成増殖過程として明示したわけではなかった。彼は、彼の生産力視点に基づいて、三階級分化として具体化されている資本主義の枠組みを、労働生産力発展の極地として描き、そこで剰余価値の発現を「事実上」確認しているにすぎない。したがって、生産的労働の第一の規定も、そうした彼の認識に基づいているにすぎず、それ以上に出るものではない。多少感覚的に言えば、これは、はなはだ心許無い規定であって、そこで、彼の確実な論証基盤が必要とされるわけであり、それはなによりも第二の規定における生産的労働とされたわけであろう。⁽⁸⁾この説明は、ただ、両規定に対するスミスの論証基礎の確実さの程度を示そうとするものにはすぎず、それが彼自身にそうしたものとして考えられていたというのではない。彼にとつては、この第一の規定は、まさに第一篇第五章から第六章への理論展開の自然さと同様に、まったく当然の規定であったと言えよう。

さて、そこで、生産的・不生産的労働についてのこの両規定を、スミスにおいて理論的に統一せしめている根本的性格はいかなるものと解すべきであるか、という問題が残る。この問題は、両規定それ自体に対する彼の原理的帰結に関して考察すること、さらに第二篇第三章が第二篇のちに続く章、すなわち第五章における彼のいわゆる「資本投下の自然的秩序」の把握との関係をいかなるものとして有しているか、ということとにわたる。後者については、次項で別個に扱う。ここでは、前者について言及しておく。もっとも、この点に関しては、その大部分をこの箇所の前半部分ですでに考察したのである。したがって、残るものはいわば結論的な性格規定である。

スミスの第一篇の「商業社会」は、あらゆる社会形態に必然的な社会の経済的基礎過程すなわち労働生産過程を抽象したものである。そして、同篇の第六章以降において、こうした経済的基礎過程が、三階級分化の枠組をもつ社会において、いかなる経済的関連・経済的基準を要請するものであるかが展開されている。しかし、この場合、当然のことであるが、そうした関連・基準による「商業社会」の具体化あるいは「商業社会」の特化した筋道が明示的に展開されたわけではなかった。言い換えれば、端的には、第一篇第五章におけるスミスの投下労働価値論の根本たる「本源的購買貨幣」それ自体が、三階級分化の社会において受け取る転化の具体的な規定を示すものではなかった。もちろん、スミスが明らかにした労働生産過程は、すでに特殊な商品経済的性格にあるものである。したがって、彼において、それが三階級分化の社会的枠組のもとで、別の特異な性格を受け取るとは理解されていないであらう。だが、それにもかかわらず、この三階級分化の社会形態は、その軸を資本・貨労働関係とする運動のうちに、歴史的発展の具体化を行なうのであって、スミスも、こうした対象をもって、彼に可能な原理的規定を取り出す以外になかったはずである。資本・貨労働関係のスミスの把握は、結局、彼の生産力視点によって、その価値の関係と物質代謝過程自体との二重の再生産関係に帰着するものであった。しかも、スミスは、すでに言及

したように、その両者が資本の価値増殖運動に基づいて統一される関係を明示する論理を展開しえなかったのである。したがって、彼にとつてそれなりに可能な両者の統一の説明は、資本・賃労働関係のもとですなわち三階級分の社会関係のもとで、彼が「事実上」具体化した価値増殖の実体つまり剰余労働と、この剰余労働の彼における原理の本質たる「商業社会」における労働との二重規定による労働であった。それゆえ、生産的・不生産的労働についての彼の「二面性」は、むしろ、資本・賃労働関係の彼の視点＝生産力視点からする「統一的」把握だ、という別の表現をも可能にするように思われるのである。つまり、言い換えれば、資本・賃労働関係において、剰余価値の事実上の発現を程示したスミスにおいては、「直接に資本と交換される労働」とは、ほかならぬ「商業社会」の労働すなわち「商品を生産する労働」なのであった。

(1) この問題は、その学説史的意義および理論的性格自体について、代表的にはすでに内田義彦教授の「経済学の生誕」、藤塚知義教授の「アダム・スミス革命」などにおいて、綿密な考察が加えられており、マルクスの考察とともに、すでにこの問題の解明の基本的作業と成果とは明白である。本稿においても、主たる考察はそれらの研究に負っており、またそれ以上に出るものではないが、「諸国民の富」の原理的領域の統一的理解に対する筆者のこれまでの若干の研究を多少とも展開しようとするものにすぎない。

(2) 周知のように、マルクスは「諸学説」で生産的労働と不生産的労働との明確な規定を与えている。すなわち、資本主義的生産を前提すると、「直接に資本と交換される労働」を生産的労働として、「直接に収入と交換される労働」を不生産的労働としてである。このマルクスの規定自体はもちろん正しいものであって、これ以上につけ加えることはない。しかし、生産的労働・不生産的労働に対するマルクスの問題意識またはこの問題の彼における「資本論」形成過程に占める位置等については、とうぜん独自の考察すべき性格を有している。とりわけ、「資本論」第一巻の草稿として残された「直接的生産過程の諸結果」におけるこの問題の彼による処理との関連で重要視されなければならない。とはいえ、この点に関する考察は、ここで取り上げる範囲を越えるものであって、それ自体を論ずる別稿に譲らざるをえない。なお、「資本

論「成立過程における草稿「直接的生産過程の諸結果」とそこでの生産的・不生産的労働の原理的処理の特徴に関して、時永淑『経済学史』（改訂増補版、一九七一年、法政大学出版局）、四三〇—三四ページを参照されたい。

(3) マルクスがここで「ずっとはるかに基本的立場に照応する」と言う場合、かならずしもその「基本」の内容は理論的に尽くされているように受け取れない。おそらく、彼は、本論文中すぐあとに引用した彼の表現からすれば、スミスのその「商品」の性格における「一般的な社会的労働」を対象にこうした理解を与えたのであろう。確かに、スミスにおける労働一般の抽象の独自性に着目し、一面でこのような評価を示すことは可能であるが、そしてまた、この点がマルクス自身の労働価値論の理解と重なることにもなっていると言いうるのであるが、後述のように、他面ではその「基本的立場」は、かならずしも、スミスの原理的性格に即しかつ十分対応するものとは言い難い。

なお、これに関連して注目されるべきことは、マルクス自身その「基本的立場」をのちに、別の性格のものとしてとらえている点である。すなわち、「直接的生産過程の諸結果」では、次のような指摘がなされている。「労働過程、一般の立場からは、われわれにとって生産的として現われたものは、ある生産物に、より詳細には、ある商品に、実現される労働だつた。」あるいは、「資本主義的労働過程は労働過程の一般的な諸規定を廃棄しはしない。それは生産物を、商品を生産する。」〔傍点は筆者。Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses, in *Arxun Mapuca u Oureuca, Tom II* (VII), 1933, S. 126 und 127. 岡崎次郎訳、国民文庫版、一〇ページ〕。

みられるように、ここではマルクスは、「労働過程一般の立場」に着目し、さきの「基本的立場」を、より一層抽象的な労働生産過程の次元に帰着させている。もちろん、右のマルクスの指摘では、「商品」と「生産物」とが並記されており、かならずしも「労働過程一般」の次元が純化されているわけではない。そして、このマルクスの理論展開自身にはまた十分な考察が独自に必要である。しかし、それはこの論究の範囲を出る問題であり、ここでは直接取り扱うことはできない。とはいえ、次のようなことは指摘しておきたい。すなわち、スミスによる労働生産過程の商品経済的抽象が、彼をして独自の生産的労働の規定を与えさせたが、しかしこれはとうぜん、マルクスの原理的対象把握とずれざるをえないわけである。このずれはマルクスの原理体系の形成過程では、一方では、商品経済の形態規定の側面と、他方ではその形態規定に基づいて成立する労働生産過程自体の抽象的规定との関係として処理されることになる。「諸学説」とこの「諸結果」との「基本的立場」に関する叙述の相違はこうした事情を示唆するものと言えよう。

(4) この点に関しては、拙稿「『経済学批判体系』の一考察」(『』『経済志林』、第四二巻一号)、九一ページ以下において若干の考察を行なっている。参照されたい。

(5) 藤塚知義教授は、スミスの生産的・不生産的労働の二つの規定をそれなりに統一的に理解するためのすぐれた論理的解明を、「アダム・スミス革命」において与えられた。教授の考察は、「生産的労働についてのスミス(の)第二の規定は、第一の、正当な、規定に即対自的（対自的）に含まれる規定を、そのものとして(対自的に)取り上げたものに外ならない」とされ、またこの「対自的」の内容についてこのように説明されている。すなわち、「資本主義的生産が社会の全生産を掌握していることを前提すれば、物質的生産のほとんどすべてが商品生産として行われ、且つこの商品生産は資本による「生産的労働」の雇用によって行なわれることとなり、従って労働および労働の生産物の素材的規定が、その形態規定(資本主義的生産関係)のもとに、包摂されること」(傍点、原文による)であると。

右の教授の説明は、幾分微妙な文脈を構成している。端的に言えば、「形態規定」のもとに「包摂される」関係にあるのは、「物質的生産」か「商品生産」か、ということである。教授は、「労働および労働生産物の素材規定」と言われているのであるから、おそらく「物質的生産」に力点を置かれているのであろう。そうだとすれば、さらに「商品生産」について考慮されるべき事柄があるわけで、これは、とくにスミスの「物質的生産」の抽象の性格について重要な点であるように思われる。つまり、教授の指摘されるような内容にとって、社会の経済的基礎過程（労働生産過程）がスミスにおいて商品経済的抽象の性格をもつものである点に同時に着目されるべきであると思われるのである。

なお、右の点と関連して、時永淑教授の次のような指摘を参照されたい。スミスの生産的労働の「第二の規定は、事実上、どんな社会形態であれ、その社会存続にとつての物質的基礎をなす労働生産過程が繰り返行なわれなければならないことを対象にした規定であつたと言ふことができる」(前出、『経済学史』、一五六ページ)。

(6) 資本と労働との再生産に関するスミスの理論的特徴については、次のような指摘をも参照されたい。「スミスが価値を存続する労働(商品に固定する労働——引用者)を、それが資本を再生産するかぎり生産的とみたことは正しい洞察をふくんでいる。しかし、スミスが価値がたんに存続するにすぎぬ場合においても資本が再生産されるというのは、資本関係が再生産されるという意味ではない。その「資本」はあくまでも物的なものととして把握されたにとどまる。ストックが資本となり、生産が資本制生産となるための基本条件たるはずの、生産手段を喪失した労働者がいかにして再生産されるか

は問題とされていないのである。」(内田義彦「増補経済学の生誕」、一九六二年、未来社、三三九ページ)。

(7) スミスにおける剰余価値の把握の理論的意義については、すでに若干の検討を行なっておいた。拙稿「経済学批判体系」の一考察」(『経済志林』、第四三巻四号)、一六ページ以下を参照されたい。

(8) こうした説明と対比されるのは、おそらくマルクスによる第一の規定の強調であろう。すなわち、すでに引用しておいたように、「これこそは、A・スミスの最大の科学的功績の一つである」と。もちろん、マルクスもすでに見たように、ただ第一の規定だけをもって、スミスのこの問題を検討しているわけではない。だが、マルクスのこの強調は、むしろ彼の対象把握の独自性から行なわれていた性格が濃厚であると思われる。スミス自身に即すれば、彼はマルクスの強調ほどには資本主義的生産の独自性をすなわち「資本と交換される労働」の特殊性を、明らかにしているわけではないであろう。なお、このマルクスとスミスとの関係については、前出の拙稿をも参照されたい。また、時永淑「経済学史」(前出、二五七ページ)の「注」の指摘も注目されるべきである。

三

周知のように、スミスの生産的労働に関する考察は、その理論的骨子は第三章で与えられているとしても、そこで尽されているわけではない。すなわち、第五章において、彼は資本の充用の効果に対する生産的労働の関係を考察している。それは彼自身としては、第三章の生産的労働の規定の展開を行なっているものと言いえようが、その展開は、一見したところかならずしも、第三章の規定が固持されているとは思われないような内容を示しているのである。第五章のスミスの叙述では、最初の部分において、資本の社会的充用部面が指摘され、それに続いて、生産的労働に関する言及として注目すべきものが二点について行なわれている。まず、その第一点は、次のような言及である。

「以上の四つの方法〔資本の充用方法として分類された〕のどれかに自分の資本が充用されている人々は、彼ら自身生産的労働者なのである。彼らの労働は、それが適切に振り向けられるならば、それが加えられる対象、つまり販売しうる商品に固定されたり、実現されたりし、一般にこの対象の価格に少なくとも彼ら自身の生活資料と消費物の価値を付加する。農業者、製造業者、御売商人、および小売商人の利潤は、すべて右のはじめの二者が生産し、あとの二者が売買する価格から引き出されるのである。」(*The wealth of nations*, op. cit., p. 362 大内・松川訳、前出書、五六四ページ)。

このように、スミスは、彼が区分した資本の従用方法によるならば、そこでは、ただ労働が生産的であるということではなしに、資本があるいは資本家の労働が生産的であると言うのである。もともと、彼はこの場合に、農業者、製造業者と御売商人、小売商人との関係を区別し、事実上、後者は前者の生み出した価値の一部をその資本の利潤とするものとしている。⁽¹⁾ところで、ここでのスミスは生産的労働を「資本の充用者」にまで拡大し、すでに第三章で与えたその規定に別の側面を付加しているように見える。あるいは、他面からすれば、第三章の生産的労働の規定の二面性が、ここでは、ただもっぱら、資本の屬性におけるものとして把握され、そこに解消されてしまっているようにも受け取れる。したがって、この点からすれば、スミスは、最早、彼の独自の労働価値論に立脚した第三章での生産的労働の規定を放棄しているように思われるのである。

しかし、右のようなスミスの叙述は、彼が第五章の最初の部分で説いた資本の充用方法の指摘の理論的性格と不可分のものとして、考えられなくてはならないだろう。彼がそこで資本の充用方法を明示しようとしたのは、次のような考えからであった。すなわち、「資本を充用するこれら四つの方法をそれぞれは、他の三つの方法の存在や拡張のためにもまた社会の一般的便宜のためにも、本質的に必要である」(op. cit., p. 360. 同前訳、五六一ページ)。

ということからであった。こうしたスミスの理解は、第三章において彼の確定した蓄積における生産的労働としての本質が三階級分化の社会枠組のもとで、または資本・賃労働関係という対象の性格に基づいて、その社会構成の特有な編成として受け取る仕方を明らかにし、同時にいわばそうした社会の空間的編成の蓄積に基づく発展⁽²⁾「拡張」を確定しようとしているものであろう。この場合も、彼の問題意識からすれば、第三章とも関連し重農主義批判とりわけその三階級分割と生産階級の把握の批判が意図されていたであらう。しかし、スミスの理論的性格からすれば、これは資本による社会の経済的編成として、彼の「社会の初期未開の状態」の対極に位置づけられているものと考えられるのであり、そのかぎりでは、彼にとっては、資本家の労働も労働者の労働も、生産的労働であるかのように説くことになっているわけである。⁽³⁾

もちろん、スミスは、労働生産過程が実現される資本の経済的編成を、原料・完成品の生産、それらの移動・分配に充用される資本としてきわめて単純に考察しているにすぎない、そして、それは、彼の理論的把握からすれば、第二篇第一章でのストックの分類において、固定・流動の資本区別が、生産資本、流通資本としての区別で与えられていたことに対応している。つまり、彼が労働生産過程を特有に編成する資本の循環運動をそれ自体として明らかにしえなかった以上、彼に可能であったのは、その循環運動を構成する二面をすなわち生産と流通とを事実的に確認することであったのであり、またそのかぎりでは、生産部面を担うか流通部面を担うかする資本の経済的社會編成を説くことになっているのである。⁽⁴⁾

したがって、スミスのこの第五章の生産的労働に対する新たな考察は、かならずしも、彼のこれまでの理論的展開の性格とは異質なものではない。彼にとって、「商業社会」を交換と分業とによって把握することになったものは、三階級分化の社会的枠組のもとでは、資本の充用方法として具体化されたその社会的経済編成とされているに

すぎない。ともにそれらは商品経済的編成として同質的にとられてはいるが、前者はその経済的基礎過程であり、後者はその現実的具体化であるという差異で示されうる程度のものであろう。それゆえ、この第五章のこうした世界が、彼の対象認識の視点すなわち生産力視点によって、その展開「拡張」の動力において整理されるならば、資本と労働との区別なしに、蓄積Ⅱ生産的労働の規定に収斂されざるをえなかったと言えよう。さらにまた、すでに検討した第三章において彼が示した労働の対象化物と労働との関係による生産的労働の規定からすれば、それはここでは、一方が資本の充用方法としてのその対象化物の経済的編成過程——つまりスミスのには粗生産物の供給、その製造、運輸、分配とかとして形成されるもの——をなし、他方がその過程に包摂される労働Ⅱ生産的労働となるわけである。⁽⁵⁾

もつとも、こうした第三章、第五章にわたるスミスの生産的労働の理解は、本質的にはすでに彼の第一篇の理論的性格とりわけ彼の二面的価値規定によって与えられていたとも言えよう。彼がその第五章で展開した労働の対自然との関係および商品相互の関係の二面的価値規定は、とうぜん、三階級分化の社会的枠組に入りうるものとして規定されたと言ってよい。そして、スミスの理論展開では、その入り方は、自然と労働との交換関係の資本とそれとの交換関係としてのものである。しかもこの場合、労働との交換の所産は、対象が自然であれ資本であれ、「生活必需品、便益品」つまり生活手段なのであって、資本自体を明確にしえないスミスにおいては、自然に代わる資本が対労働との関係で問題にされることになる⁽⁶⁾と、それは、先きに言及したような、そこから労働によって生活手段を引き出す社会的経済編成としてしか把握されなかつたのである。

ところで、スミスは、第二篇第五章でもうひとつ別の論点から生産的労働に言及している。それは、先述の四つの資本充用方法における生産的労働の活動効果の差異に関してである。すなわち、彼はこのように指摘しているの

である。「等額の資本でも、以上の四つ異なる方法のどれに充用されるかによって、直接にそれが活動させる生産的労働の量には、はなはだしい差異があるであろうし、また、それが属する社会の土地と労働の年々の生産物の価値を増加させる割合にも、はなはだしい差異があるであろう。」(*The wealth of nations*, op. cit., p. 362. 同前訳、五六四ページ。)そしてさらに、彼は、この割合の差異を、四つの資本の充用方法について比較しているのであるが、そこでは、まず「農業者の資本」が取り上げられ、次のように言われているのである。「等額の資本のうち、農業者の資本ほどの多量の生産的労働を活動させるものはない。」(op. cit., p. 363. 同前訳、五六五ページ。)そして、こうした農業を筆頭に以下製造業、御売商業というように、「多量または少量の生産的労働を活動させ」、また「その国の土地と労働の年々の生産物に多量または少量の価値を付加する」(op. cit., p. 363. 同前訳、五七一ページ。)と言うのである。

スミスがこうした理解を展開するにあたって、とくに農業における資本の充用が最も生産的であるゆえんを説いている諸点は、しばしば指摘されているように、きわめて重農主義的見解に依存しているがごとくである。周知のように、彼は、農業では自然も労働し、役畜もまた生産的労働者だとしているのであって、ここでは最早彼の本来の生産的労働の規定を固持しているとは考えられないのである。しかし、この点にスミスにおける重農主義的理解の残滓を考慮するとしても、なおスミスにおいて独自にこのような理解が生ずる点もありうると思われる。

まず、この点でスミスが明らかにしている論点として注目されるのは、彼の地代論の理解から生ずるものである。すなわち、彼は農業への資本の充用の有利さを、地代の成立と結びつけて説いているのであって、それは、地代が「人間の所産とみなしうるあらゆるものを差し引き、またはそれをつぐなってなおそのあとに残る自然の所産である」(op. cit., p. 364. 同前訳、五六六ページ。)ということにある。彼の地代論自体の考察はともかくとして、支配

労働価値論—価値構成説として説かれた彼の自然価格の一構成要素の論理的筋道からみれば、他産業部面の生産物との交換を前提とする農業部面の生産物の価値は、おそらくスミスでは「自然もまた人間とらんで労働する」関係でしか把握されないことになったのであろう。⁽⁷⁾したがって、ここでは、農業と他産業とのいわば横の比較の論点⁽⁷⁾が、あたかも労働と自然とのいわば縦の論点から移し換えられて主張されているにすぎない。そしてこれは、資本が独自の性格に基づいて形成するこの社会の特殊的な経済的編成をそれ自体として明示しえなかつたスミスに必然的な弱点であらう。

しかし、この点は、スミスにおいてさらに独自の見解が背後で関連していたように思われる。スミスは、第二章第五章から続いて、第三篇で、いわば彼の自然的歴史発展論を与えているのであるが、ここでは、彼は右の論点に關係すると思われる次のような周知の発展論を示しているのである。すなわち、「事物の自然的運行によれば、あらゆる発展的な社会の資本の大部分は、まず第一に農業に振り向けられ、次に製造業に振り向けられ、そして最後に外国商業に振り向けられる」(Op. cit., p. 380. 同前訳、五八八ページ)と。また、彼がこうした帰結を与えることになった理解は、ここでは、このようなものであった。「生活手段は、事物の性質上、便益品やぜいたく品に先きだつものであるから、前者を調達する産業は、必然的に後者に奉仕する産業に先きだたなければならぬ。それゆえ、生活手段を提供する農村の耕作や改良は、必然的に便益やぜいたくの手段しか提供しない都会の拡大に先きだたなければならぬ。農村の剰余生産物だけが、つまり耕作者の生活維持を越える分だけが、都会の生活手段を構成するのであるから、そこで都会はこの剰余生産物の増加をもつてはじめて拡大しうるのである。」(Op. cit., p. 377. 同前訳、五八四ページ)。

このようなスミスの歴史認識は、彼の自然的なそれと密接な関連を有するものと言いうるのであろう。そして、

これが彼に独自の点は、経済的な「事物の自然的順序」として純化されているところにある。しかも、こうした彼の歴史認識は、それ自体としては、いわば「諸国民の富」の原理的領域——つまりその第一、第二篇——の論理展開に、その背後から裏打ちする関係のものであったと言いうる。あるいは、そう解するよりは、むしろ、スミスでは、一方で社会存続のその自己原理の認識として展開されるものと、歴史発展の認識として叙述されるものとの相違があるという程度の差異が示されているにすぎないと言いえよう。したがって、例えば、第三篇の最初の部分で説かれている農村と都会との分業は、彼にとっては、ただちに「他の場合と同様、労働が細分されたいろいろな職業に従事するありとあらゆる人にとって有利なのである」(p. cit., p. 376. 同前訳、三五五—頁)とされるにすぎない。したがって、ことを変えるならば、彼の原理認識と歴史のそれとは、前者はいわば商品経済的編成としての空間的な社会認識であり、後者は生産力発展の時間的整序であるという性格の差異と言いえるであろう。

そうだとすれば、前述の農業への資本の充用を最も生産的だとするスミスの理解は、対象のつまり近代社会の把握において、同時に歴史的な発展として生産力視角から説くことになるものを、三階級分化の社会的枠組の経済的編成のなかに、いわば空間的に展開させた論理であると考えられる。したがって、それは、ただ単に重農主義的残滓としてしまうわけにはいかないのであって、そこにはやはりスミス独自の論理による原理的展開が含まれていると言ふべきであろう。

さらに、このようにみるならば、彼の資本充用の四つの方法の差異に関するその他のものとの関連についても、特に農業の場合と相違する性格にはないと言いうる。ただ単に、彼の「事物の自然的順序」が時間的Ⅱ歴史的に与えられるか、空間的Ⅱ社会的編成として与えられるかの違いがあるだけなのである。そうとはいえ、スミスにとっても、三階級分化の社会的枠組のもとでは、それは現実的には資本の利潤追求運動に基づいて形成されていることを

無視するわけにいかないものであり、そのかぎりでは単に生産的労働の視点からの論理に終始することになりえなかつた。つまり、「自分自身の私的な利潤についての考慮こそ、ある資本の所有者がその資本を農業に充用するか、製造業に充用するか、それとも御売や小売の若干の特定部門に充用するかを決定する唯一の動機である」(Op. cit. p. 374. 同前訳、五八〇ページ)ということなのである。

かくして、スミスの生産的労働の規定は、彼が社会の経済的基礎過程を対象にし、しかもそれを労働価値論によって規定しえたかぎりでは、彼独自の社会の経済的編成の原理のうちに説きうる論理的基準をなすものとなつてゐる、と言えよう。しかし、他面では、右の第二篇第五章の終りの部分の叙述のように、彼は資本を主体とする資本主義社会の経済的編成の原理を文字通りそれ自体として確立しえたわけではなく、この点に関しては、単に私利利潤の追求動機を現実的に確認することではしかなかつたのである。したがつて、ここでは、労働生産過程の商品経済的絶対化によって対象把握を行なつたスミスの限界が、改たつて生産的労働の規定と、資本による社会編成の特質との乖離として現出したと言いうるのであろう。もちろん、これは、彼の原理体系の本質に内在する理論的分裂とか混乱とかと言われるような性質にはない。第一、二篇を通ずる彼の理論的展開からすれば、一方の極では、自然を対象とする「本源的購買貨幣」としての労働として、他方の極では、労働の対象化物の物的編成に対する生産的労働として、彼独自の労働価値論による筋道を経つつ描かれてゐるとしうるのである。

もちろん、スミスは、この場合において、社会の経済的基礎過程＝労働生産過程を、それ自体としても、また資本の生産過程としてのその独自の性格つまり価値形成増殖過程という性格としても、明確にしえてはいない。したがつて、彼の生産的労働の規定もとうぜん、生産的労働の社会的規定としても、また資本・賃労働関係のもつてそれが受け取る独自の性格としても、確立されるべき概念規定にまではまだ達しえていない。この点は、ひとまず

は、D・リカードによって、対象が三階級分化の社会として絶対的に設定され、この三者の自然的行程論として純化され、かつまたその三者の価値的関連において統一されることを、通らなければならなかった。

(1) ここでのスミスの叙述つまり「農業者、製造業者、御売商人および小売商人の利潤は、すべて右のはじめの二者が生産し……」によれば、本文で述べたような理解になるように考えられる。しかし、この点に関しては、スミスが明確にそうした理解のうえに立っているとは言えない。彼はそのすぐあとと文章中で、次のようにも言っているのである。「彼〔御売商人〕の資本は、その財貨がある地方から別の地方へ輸送する水夫や仲立人を雇用し、またそれは、これらの財貨の価格を、自分の利潤の価値分だけではなく、水夫や仲立人の賃銀の価値分をも増加させる。これが、この資本が直接に活動させる生産的労働のすべてであり、またこれが、この資本が年々の生産物に直接に付加する価値のすべてである。」(*The wealth of nations*. op. cit., p. 363. 同前訳、五六四―六五ページ)

ここでは、スミスは、先の叙述と若干異なる内容を展開している。つまり、彼は流通過程に従事する労働も生産的労働だとしており、そして、この労働がそういうものとして商品に価値を付加すると説いているのである。彼がこのような指摘をもって、あらゆる社会に共通する流通費用の性格をとらえたとしうるわけではないが、のちに普及するように、彼が資本の充用方法という観点によって、社会の経済的編成を対象にしたかぎりでは、これをも生産的労働として把握することになったのである。

(2) スミスの生産的・不生産的労働の規定の学説史的背景では、彼の重農主義に対する批判的継承関係が考慮されなければならないであろう。「諸国民の富」第四篇の学説史的検討を別にすれば、重農主義との関係で生産的労働のスミス独自の批判的展開は、第二篇第三章、第五章および第三篇などを通じて、与えられていると思われる。なお、このこととの関係で、第五章でのスミスの農業重視の学説史的意義については、羽鳥卓也教授の最近の論稿「国富論」における生産的労働と蓄積ファンダ」(経済学史学会編「国富論」の成立、一九七六年、岩波書店)を参照されたい。

(3) マルクスは、先に本文中で引用した第五章の最初の部分での四つの生産方法の分類と生産的労働との関連に対するスミスの叙述を引用し、それについて「ここでわれわれはまた生産的労働者に関するまったく新たな定義をもつことになる」(*Theorien*, a. a. O., S. 235)と指摘している。確かに、第五章の生産的労働に関するスミスの説明は、第三章のそれと

異なっている。しかし、のちに述べるように、それは単に「まったく新たな定義」としてのみ処理されるものではない。やはり、この場合においても、スミスの原理的展開のもとで、彼の一定の論理的コンテクストに基づいて、その原理的意義を明らかにしなくてはならないだろう。また実際に、スミスのこの論点は、総じて第二篇の蓄積論の彼独自の理論的構造の一面をなしているのである。なお、マルクスは、スミスが資本家を生産的労働者とみなしている点について同じ箇所、次のように言っている。「概して、スミスは、彼らの生産性を、彼らが生産的労働者を活動させるといふことに帰着させている。」

(4) 「諸国民の富」第二篇第一章におけるスミスの資本区別に関連して、彼がいかなる資本循環形式を把握しているかの問題がある。ここでは、そうした論点を検討することはできない。だが、第一章における固定・流動の資本区別が、周知のごとく「主人を変える」か否か、または「流通すること」によってか否かによってなされているかぎり、その区別は生産部面における資本すなわち生産資本と、流通部面における資本すなわち流通資本との素材的区分をしているにすぎないと言うべきであろう。したがって、彼は、少なくとも、資本の生産および流通の両過程を経る循環的性格の一面を取り出していると考えうるが、彼が文字通りそれによっていずれかの資本の循環形式を明らかにしているとは言いえないと思われる。なおこの点に関しては、時永淑、前出書、二一六ページ、二五二―五三ページの指摘を参照されたい。

(5) 「諸国民の富」第二篇第五章のいわゆる「資本投下の自然的順序の理論」としての論点に関しては、小林昇「国富論体系の成立」第七章の興味ある考察を参照されたい。ところで、小林教授は、第五章でのスミスのその「理論」は「資本投下における自然的順序の存在をほとんどまったく証明できていない」とされ、また、その難点を指摘されつつ、第五章のスミスの論述に関して、次のように言われている。「こうしてみると、資本投下の自然的順序にかんする『国富論』の立言は、その理論的根拠の証明にあたっては、ほとんど全面的に破産しているというべきであろう。われわれはそこでではわずかに、各種の御売商業の内部にそれぞれの運転させる国内資本の個数の大きさによる投下の順序が存在するという主張だけを、国民経済の形成という立場から承認しようのにすぎないのである。こうして、『国富論』における資本投下の自然的順序の理論は……ただちには経済学の基礎財産となることがなかったのであった。そしてこのかぎり、『国富論』第二篇を第三・四両編につながる理論の環はいちじるしく弱いといわなくてはならない。しかし、それにもかかわらず、第三・四両編がそれ自体の十分な重みを持ち、歴史批判および現状批判としてそれぞれの深くまた広い領域を形成しつつ、第一・

第二兩編との接続の点でも不安定を感じさせないのは、なぜであろうか。それは一言でいえば、資本投下の自然的順序という考えが、国民経済の成立という具体的な形をとっておこなわれた近代産業の成立史に対する、するどい洞察と結合しているからである。」(同前書、一九七三年、未來社、一九六、一九九—二〇〇ページ。傍点—原文による。)

右の教授の指摘は、きわめて示唆に富むものだと見えよう。しかし、第二篇第五章のスマイスの叙述が教授の指摘される性格にあるとしても、その理論的破産にもかかわらず、教授のことばでは「不安定を感じさせない」性格をもち、それが、「国民経済の成立」の「洞察」によって支えられているためだとされることには、疑問が残るのである。というのは、教授自身の指摘によっても、「国富論」のこの二つの部分——いわば理論編と歴史編(およびそれにつづく現状分析の編)——をつなぐものが、後者を予定してその導入部となろうとする、前者の第二編第五章での、資本投下の自然的順序の理論であった(同前、二〇一ページ)とされているのである。まさに、第二篇第五章は教授の指摘されるような位置づけにおいて理解されるべきであろう。ところで、そうだとすれば、第五章の「理論」は、「理論」としての「破産」または「いちじるしく弱い」環とされてしまうのではなく、したがってまた「国民経済の形成という立場」でもなく、その「環」としての「理論」のスマイスにおける原理的性格が考慮されなければならないと思われるのである。

(6) スミスは、「諸国民の富」第二編第一章において、周知のストックの分類を行ない、彼なりの社会的再生産の考察を与えている。しかし、ここではすでに言及したように、彼はそれによって資本が生産過程を独自に実現・編成するその仕方に基づいてそれを明らかにしえたわけではなかった。その点は、彼のいわゆる「 $v+m$ のドグマ」の性格によって端的に示されているわけである。したがって、この性格に基づけば、このように言えよう。すなわち、「スマイスが一方で、資本の再生産を事実に観察したかぎりで不変資本の存在を認めながら、他方、理論的には、その再生産過程が、社会的総資本の価値補填をどのように行なうかを理論的に説明することが不可能だったことを示すものにほかならない。だから、この矛盾は、要するに、スマイスにおける事実的考察とスマイス流の理論的説明とが首尾一貫せず分離していることを示すもの」と言うことができる(時永淑、前出書、二五四—二五〇ページ)と。

右のような指摘は、また同時にこの第五章でのスマイスの対象理解になつていたのであって、彼は、彼の対象をなす資本主義の資本による独自の経済的編成をそれ自体として明示しえなかつたのであり、そうしたいわば資本の社会空間的編成を単に事実的に——とはいえ彼の視点に基づいて——確認しているにすぎない。

(7) さらに、第五章におけるスミスのこうした理解と第一篇第十一章との関係については、羽鳥卓也教授の前出論文、同前書、二四二ページ以下を参照されたい。なお、教授は、同論文中において、「土地生産物の若干の部分に対しては、それを市場へもたらすのに十分なものよりも高い価格を必ずつねに生ずるほどの需要があるにちがいない」(*The wealth of nations*, op. cit., p. 162. 同前訳、二八一ページ)と指摘したスミスの一文章を引用し、そこでの議論を、「スミス自身が第二編第五章で打出した地代の本質規定を補充するものとみることができ」(同前書、二四九ページ)とまで言われている。教授のこの見解は、おそらく、スミスが第二編第五章で「地代を究極的には自然の労働の産出する価値と規定した」(同前書、二四二ページ)という理解によっているものであろう。しかし、スミスの地代の規定をこうした教授の見解のように解することには疑問が残らざるをえない。というのは、そもそも、スミスが第一篇第十一章で固有に展開した彼の地代論そのものによっても、彼の地代論は、地代を他の自然価格の構成要素と同様に原理的に明確な地位を与えられているように考えられないからである。周知のように、スミスはここでは、賃銀、利潤を諸商品の価格の構成要素したがって価格の原因としながら、地代については価格の結果であるという理解をも示し、彼の原理の基礎上での地代の固有の解明を一貫せしめていないのである。スミスにあっては、三階級分化の社会的枠組のもとでは、現実的には地代が価値構成部分として入り込まなければならなかったが、彼の投下労働価値論によっては、剰余価値を事実上確認し、利潤の根拠を提示しえても、地代を必然的なものとして確定しうることはできなかった。

したがって、スミスの第二編第五章の地代の根拠に関する言及は、一面では三階級分化の社会の経済的編成を「四つの資本の充用方法」として説くことになった限りで、価値構成部分としての地代が論述され、他面では、彼の地代論の弱点が彼をして重農主義の見解への依存を余儀なくさせることになった性格にあると考えるべきであらう。そこで、「これを直ちにスミスにおける重農主義的残滓と評して片づけるべきではない」(同前書、二四〇ページ)としても、また確かにそう考えられるべきであるが、「残滓」はやはり「残滓」として考慮されなければならないであらう。そして、それが考慮されるかぎり、第一、二篇のスミスの原理的規定における非重農主義的性格の特質に基づいて彼の地代論の本来の性格がその本質として理解されなければならない。そうだとすれば、第五章の地代の規定をもって、その「本質規定」とするわけにはいかないのではなからうか。